

ツキノワグマの異常出没を考える

島根県中山間地域研究センター 澤田 誠吾

西中国山地(島根, 広島, 山口)は豊かな森の象徴であるツキノワグマ(*Ursus thibetanus*)の生息地である。しかし、生息数は、1998~1999年の調査で約480頭と推定され、日本版レッドデータブックでは「絶滅のおそれのある地域個体群」とされている。近年、人家周辺域へ出没することが多くなり、養蜂やクリ園などで被害が増加し、またイノシシ捕獲用の脚くりワナ等による錯誤捕獲が増加して問題となっている。

ツキノワグマは、植物を中心とした雑食性で、薄暗い朝方と夕暮れ時を中心に行動する。一般にオスは3~4歳頃から繁殖可能で、メスは4~5歳頃に初産する。交尾期は6~7月頃だが、受精卵はすぐに子宮に着床せず浮遊状態にあり11月頃から成長を始める(着床遅延)。12~4月頃まで樹洞や土・岩穴で越冬し、2月頃にメスはふつう2頭の子を産み、生まれる胎児は数百g程度と小さい。繁殖力は低く、寿命は約20年である。テリトリー(縄張り)は無く、行動域はオス40~70km、メス20~30km程度であるが、堅果類が不作の年には餌を求めて行動域が2倍以上に広がる場合もある。

2004年度の異常出没の原因を捕獲個体の分析などから探った。捕獲数は、脚くりワナや箱ワナによる錯誤捕獲45頭、カキや養蜂被害による有害鳥獣捕獲66頭および緊急避難4頭の合計115頭であったが、錯誤捕獲のうち15頭は放獣した。昨年は、全国的にツキノワグマが人里へ異常出没したが、本県においても目撃件数と捕獲数はこれまでに例のないほど多数であった。

捕獲個体の年齢構成は0~25歳であり、平均7.3歳(オス6.1, メス9.1)であった。例年に比べると高齢個体も多かったが、3歳以下の若齢個体が40%を占めた。胃内容物は、9月にはクリ、10、11月にはカキなどの果実や蜂巣が多かったが、堅果類の割合は少なかった。また、有害鳥獣捕獲個体は、カキや養蜂ミツバチなどのクマが誘引されたものが多かった。栄養状態を腎脂肪指数からみたが、例年に比べてむしろ良い状態にあった。しかし、子グマを連れた母グマの中には極端にやせた栄養状態の悪い個体も認められた。母グマは、授乳のために高栄養の餌が必要であるが、個体によっては子づれのため十分に餌が確保出来なかったものと考えられた。

目視による堅果類の豊凶調査では、東部地域では、シバグリは並作傾向、ミズナラ、コナラはやや凶作傾向、ブナは凶作傾向であった。一方、西部地域ではシバグリは並作傾向、ミズナラ、コナラ、ブナは凶作傾向であった。奥地でのクマの痕跡調査では、クマ棚、爪痕、食痕、糞などをまったく確認できなかった。これらのことから、堅果類の凶作傾向や頻繁な台風の襲来によって餌資源が少なかったことが里部への異常出没の大きな要因と推測された。

ツキノワグマは、聴覚や嗅覚が優れているため、ほとんどの場合は、人よりも先に人の接近を感知して逃げていく。しかし、ツキノワグマとの不意の出会いを避けるために次の必要がある。①クマは音には敏感なので、鈴やラジオ等で人間の存在を知らせる。川の近くは音が聞こえにくいので注意。②クマの行動時間帯(早朝と夕方)に生息地へ入るのは避ける。③子グマを見たらその場を立ち去る。近くには、母グマがいるので危険。④山菜やきのこ採りなどの場合は、周囲への注意力が低下するので、とくに気をつける。⑤クマの生息地では単独行動を避け、できるだけ二人以上で行動する。⑥山林作業など頻繁に生息地に入る人は、クマ撃退スプレー(カプサイシンスプレー)を携帯する。

ツキノワグマは、一般的に考えられているよりも臆病でおとなしい性格である。ツキノワグマを保護することは、豊かな森の生態系を保全することでもあり、ひいては森を活性化させることにつながる。クマを一方的な悪者にせず、クマについて理解し、共存する方法を考えていくことが重要である。